女學雜誌

第二百八十四號

明治二十四年九月廿六日發兌

獨語

愛山生記

獨語する者は淺野の家臣夢野の莊平のなれの果、俳人烏有堂、愛山生代つて辨じ、語々卓犖奇矯、文學界近時の一大異觀。些さか以て讀者の眼を清新にするに足らん歟。

女園洲

五雜俎史（パル、マル、アゼツター）

女園洲とは何人ぞ、嘗て歐洲の梨園を震動し、道德と技藝と、ジヨンソン、秀康をすら感泣せしむるに足りたるアンデルソン女史の事なり　脫足して和樂せるホームの主婦となりたる後ち近況何如ん。是れ何人も聞かんとを欲する所なるのみならず、新に女壯士演劇など起さんとするものもし聞かは、當に愧死すべきの佳談なり。

下六番町六番地　女學雜誌社

Sept. 1891
T.O. 284

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 284. SEPTEMBER 26TH. 1891.

EDITORIAL:—The new style

MISCELLANEOUS:—Soliloquy. (Aizansei.)

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

HOUSEHOLD:—Uses of charcoal. (Mrs. Yoshida.) Cleaning foreign clothes for the winter

LITERARY:—Poems of the "Kakashi-no-ya" circle.

CRITICAL NOTES.

NOTES AND NEWS.

第二百八十四號目次

●社說 文體一新
●雜錄 獨り言（愛山生）
●家政 炭の功用（吉田のぶ子）○冬向洋服掃除
●評論 女湖洲
●兒籃 小公子（若松しづ子）
●小說 流れの水○若恋の鎖
●文學 案山子の會社中詠歌の批評
●批評 最新家庭談○幼稚園切符○新紙一覧○日本の花及園藝○日本正教會史料
●時事 鐵道其上○品川風○投票式○秋○政務部○兵備○増小人

MISSION SCHOOLS FOR GIRLS.

THE *Jogaku Zasshi* (the Woman's Magazine) has commenced an interesting series of articles pointing out the merits and defects of female schools of different classes. The first article is of special interest and importance to our readers, as it deals with mission schools. These schools, says our contemporary, are now the subject of much adverse comment not only outside but within the pale of the Christian community. The Tokyo journal, however, is not in sympathy with the majority of the hostile critics. It compares them to a blade of grass bending in whatever direction the wind blows. The mission schools have defects, but they are not without some praiseworthy characteristics distinguishing them from schools of every class. The most noteworthy of these characteristics is stated to be the freedom of such schools from periodic changes in the policy of education; changes to which Japanese female schools, both Government and private, have been usually subjected, either by alteration in the *personnel* of the Minister of Education or by lack of funds. Our contemporary regrets that some Japanese connected with the mission schools are too ready to complain in public of their European or American associates. Should the foreigners persist in discarding the advice and suggestions of the Japanese, then the most honourable course for the latter is to leave their position. To speak ill of one's colleagues and yet remain connected with them, is "a disgrace to the Japanese *samurai*." The Tokyo periodical then tells Missionaries connected with these schools that they, too, are not free from blame. "They have neither the ability to know the Japanese nor the magnanimity to accord proper treatment to men of capacity." The time has now arrived when the Missionaries are imperatively called upon to calmly consider the situation of their female schools and come to some prompt decision. Is their object to give common education in these schools? Then they are asked to choose one of two courses, either to hand over the entire control to Japanese, or to qualify themselves for their position by thoroughly mastering the Japanese language; for "there is no civilized country in the world which trusts the education of its young girls to foreign teachers, or which adopts a foreign language as a basis for common education." If missionaries are courageous enough to transfer the control to Japanese hands, as was recently done in the Girls' School of Tsukiji, they are exhorted to do so by all means. But if they do not possess such courage, then they ought to be contented with confining themselves to the particular spheres of education in which they have a reasonable hope of achieving success; as, for instance, the instruction of a small select number of students in the higher branches of knowledge, the education of pastors or of poor children. Perhaps it is extravagant to expect missionaries to surrender the control of their female schools to Japanese, for power and money do not exist separately and the foreign missionaries grasp the purse. But we are told that it ill becomes the missionaries as religious men either to refuse to give power to the Japanese or to confine their efforts to the special branches of education above alluded to. Lastly, our contemporary warns the missionaries against any half-hearted and time-serving reform, and declares that it is a very injurious practice to make patch-work of a programme of instruction, instead of thoroughly reforming it. The interest of the article would have been greatly enhanced did it contain some clear statement of the objections urged against the present management of female mission schools.

"Japan Mail"

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百八十四號　明治二十四年九月廿六日發兌

社説

文態一新

父の産を分予へられたる季子、之を以て遠國に旅立し、偏歷流浪の間だに放蕩して、分資を悉とく耗ひやせり、辛くも人に使わるゝ身となり果て、野に出で、家の食ふべき豆莢にて腹を滿せしが、歎じて云く、我父の所には食物あまれる傭人の許多かあるに、我は飢て死んとす、起ちて我父に行き其の恩顧の下に歸らんと。

世上の万事やゝ生育して獨り立する頃ひに至れば、僅かなる自力を賴みて、家外に周走流轉するとありと雖ども、遂には元の家に歸りて、當初の褥に就かずと云ふとなし。

維新以來の變動遷移そも〳〵幾段々ぞ。或時は純然たる佛蘭西人の如く、急激の處置人目を驚かせしものあり。又或時は彷彿たる英國人の如く、立憲保守の理想に醉ひて早く若隱居せんずる狀あり。又或時は頑然たる獨逸人の如く、國家帝室など云ひて蝸牛の殼に縮み榮螺の貝に執着せしものゝ態ありける。而も、今は保守の夢さめ、國家主義の影實を顯はし、誠眞なる國躰政治將に行はれんとするの運とはなりぬ。

文學の事亦斯の如し。夫れ、文學の發生に二種の大機會あり。曇天上に懸り、熱地下に沸き、世上大ひに暴れんとして、警標連りに垂るゝの曉、先覺の人他の惰眠の徒を警醒せんが爲めか、若くは、女媧氏となりて此の天地を支持修補せんとを欲するが爲めに、大ひに文に叫ぶの時運あり、之を第一種の機會となす。太平打つゞき、五穀豐かに饒り、天下差したる大事件なくして、戶每の萬民先づ〳〵安泰する頃ほひ、或ひは英雄談の快活なるに長き秋の夜を忍び、或ひは綿纏たる相思相愛の戀話に春の胡蝶を怨む情けを慰するなど、閒を消し思ひを遣るの讀物あらんとを祈るの時、此の需要に應ぜんとするの錦繡文字必らずや起る、之を第二種の機會となす。

而して、經國美談先づ起り、書生氣質次ひで現はれたるの時節は、正に第二種の機會にてありける。國會の開設は十年の后と定まり、冒險客氣の靑年も最早沈着準備すべき塲合となり、一大團明らかに引れて、爾後十年はたゞ其内に小運動を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

試むべき時勢となりければ、所謂る準備時代、即はち優柔なる社會改良時代、之を別言すれば、重箱の内のみを掃除する公家様仕方の時代とはなれりける。

如此き時勢に於ける文學は、脆軟かく、心小さく、齷齪々くしき小文人の手にかゝること多きものなり。書生氣質以來、考妙抜群の文學者三四出現したることは決して爭そふ可らざるの事實にして、吾人は深く昭代の爲に之を祝するものなりと云へど、かゝる公家様時代の波にうかれて、木の葉の如く漂着したる自稱文學者も亦少なしとせず。悲しき哉、雲の如き數其群を合して、靜けき夕暮のひゞきとなり、一世の文態皆らく其流派の流れに倣ひぬ。

扨て、勝手我儘に彼等が試験したる道行は何如なりしぞ。先づ、羅馬字文及び假名文を崇拜せしよにてありき、然れども羅馬字は久しからずして隱居歸ひ出で、假名も暫々しからず成行たり。其反動として、六かしき文語文ことしく頭べを擡げたり、左れど該は幾度か用に立たざりしにあらずやとて、直ちに御免となりぬ。更に其反動として言文一致の躰と云ふもの出で來にたり、若し行わるれば、至つて重宝なるものなれど、筋を引張れるが如く、山鳥の尾のながくしきが如く、萬事につけて法性寺の入道を繰反すは煩らわしとて、是も亦久しく世に時めくと能わず。此に於てか、言文一致に多少の味を加へ、雅俗を折衷して風流の心を遣らんとて、元祿時代の文躰俄かに流行することとなりぬ。其引つゞきとして、俳諧も亦多少行われんとしたり。然れども、元祿ものは、其上の不徳時代にすら遂に禁制となれり、況してや方今の士風に久しく好遇せらるべき筈なく、よし好遇せんとするものありとも、文明の大勢は之を推流すと固よりなり。流行八ヶ月、漸次に衰ろへ行き、更に其反動として、平安朝の物語、日記、草紙の躰幽靈の如く迷い出で、侍るなり、候ふなりとて苦吟しつれど、此も亦た今の時勢に適すべきにあらず、歌もろともに廢りゆき、先日來又々漢文學多少世に出でんとしつれど、惣じて漢文學の流行は取分け短かき壽命にして、而して漢文學の流行はつねに一大變移の過渡となるものなれば、思ふに今は則はち文態一新の機正に中するの時と云ふべき歟。

愚者の一生は人の傳記を繰反し、暗黒の歴史は古代史を復習するに異ならず。近ごろ、輕々文士の小舟に乘りて移り行き

流れ廻りたる文態の變遷は、應神天皇以來すでに定まり切つたる文學史の道行を演習したるもの也耳。學校の敎育を人類發達の開化史を繰反すものとせば、文學が最近十年間に繰反したる經歷は、亦是れ其が爲めの敎育にやあるらん。斯く辨じ、以て些さか慰さむる所ろあるべき也。

左れど、今となりては最早や確と拗辨せずんばある可らず。むかし、漢字の渡來したる時は、我國に是と云ふ程の文字なかりしかば、則はち採つて我國に使用したるのみ。其后、新字を造りしものもあり、梵字を輸入したるものもありと云へど、最早や其効なかりき。然るに、二千年の因緣を經たる今日に至り、俄然西洋の蟹行字を擧て此の舊文字を追拂はんとするは、土地に住する人の土地に退去を命ずるに異ならず、徒勞は止むとを得ざりし也。亦た、假名文に復せしめんとするも、進化の理を知らざる愚なり、假名文はむかし既に劣敗して、漢和混淆文に優勝の運を呈したるものなり、今日また盛かへさんとするは、一眇夫、源家を窺がひしに同じ。俳偕は、俠客の入用なる時と、禪坊守の戀しき時などには、多少用を爲せど、文明日進の時勢に伴隨し得るものにあらず。況んや短歌のみにて、無限の思想を現はさんとするは、到底出來がたきとなり。彼等皆な時勢の進步に後れて衰退したるものなり。元祿文は、當時すでに禁ぜられたり、安くんぞ文明の時に生存するとを得ん。漢文は、つねに和文と混淆調和して、初めて發達したり、純然たる漢文は、平安朝以前に一ど度び衰ろへ、徳川氏末世に先だつて早く隱れたり、其の片くろしき文字のみにて、獨立獨行せんと云ふは、韓退之の如き人のみの愚論なり。

ビネー曰く、文躰は人の心理なりと。國躰によりて文躰を異にし、時勢につれて、文躰の相違しゆくと亦論ずる迄もなし。左れば、國民の思想内外の潮流を合して、其質に大變化を生するの時は、文の躰亦た隨變せずんばあらず。而して、其躰たる、書く人その思想を尤とも容易に表現はすとを得、讀む人尤とも容易に解釋するとを得るの方向に進み、其尤とも平易自由なる所ろに至りて安着するを定則となす。故に、天武の朝以前たゞ漢文のみ隆んに行はれたるが、土佐日記以下の女文と和合して、遂に榮花、今昔などの物語り、盛衰記、太平記の巧妙和熟せる日本文に至れる迄て、漢和全く混淆せり。

其后兩者亦別離して、各途に發達せんとしたりしかば、春台、白石、益軒、鳩巣の流、亦起つて之を調合し、再たび、自由にして自然なる日本文とはなしける。

故に文躰の發達は必らずや、斯の如き理法を歩み、國民思想の大變遷ある毎に其躰を變じて、而して其状ども自然平易なる所ろに沈着すると必せり。此に至りて知る、今后更に沈着すべき日本の新文躰は、漢文躰にあらず、和文躰にあらず、歐文躰にあらず、無韻併文躰、元祿躰などにあらずして、即はち、東西兩洋、古今内外の文躰を調合し、今日の思想を尤ども平易に言現はすことを得て、而して讀者にもども容易に解味せらるゝの體なると必定なり。

此機に際會して、正に相當するの文躰を創造し、世上の讀者に示して、其感化を北斗星の尺の如く、引かんことを欲するものは、其文の中に有爲健全なる思想を含蓄せずんばある可からず。措辭結體如何に巧みなりとも、若し此の大思想を欠かば、暫らくにして滅せん。神皇正統記、日本外史、などの今に傳はり愛誦せらるゝものは、其文字の妙なるゆへのみにはあらざる也。

雜録

獨語　　愛山生

獨語するものは淺野の家臣萱野の瓶平のなれのはて、俳人鳥有堂、

扨て世の中は分らぬ奴、手前勝手な奴、我儘な奴の寄合ではあるぞ！慶長五年關ケ原に於て權現様關西の大名を切従へ給ひてより、今日に至るまで最早百年計り、元和元年大坂夏御陣此方といふものは天草一亂の外血なまぐさい風の吹たことのない泰平の御世に生れながら、我藩の馬鹿者共が氣狂じみた復讐の沙汰、其を善ひ事と心得てか、やれ忠臣のやれ義士のと褒そやし、天下の爲を思ふて、此氣狂に同心しなかつた我等を腰抜の様に言ふとは殘念千萬。我等が腰抜なれば、爾等はそれに輪をかけた腰抜なり。やれ大石が楽て原がこうじやと。忠臣さだがこうじれば、女性が治郎狂言を桟敷で見る様に、涙をこぼし歯を切る馬鹿者め。蔭で力んだとて何の役に立つか。此間も泉岳寺に行た朋友の話しに。或る藩中の士、大小いかめしく、はりひぢしながら大

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

石の墓を拜んでの獨語に。國亂れて忠臣現れ、家貧しふして孝子顯る。申すも畏けれど御殿樣家にもし事ありて見よ、弓矢八幡も照覽あれ。大石殿も泉下より聽賜へ。我此五尺の躰を粉にしても、忠義は赤穗の家臣に限らぬ事を世間に示してくれんと。拳固で瞼をこすりながらの述懷。其時吾世は名聞の世の中になつたり。名聞に仇伐ものもあれば名聞に涙をこぼすものもあり。ない仇伐ふと心懸るものもありと淺間敷く思ひながら猶其人につひて行くに。アキレたとには、此士つよそうで大によわく、ゑらそふで太だゑらくなく、折ふし穀からはい出した二尺計りの蛇にアット云てきもをつぶし。歯の根合はず、顏色青ざめ、いそいで逃出した見苦しさ、氣の毒さ、なんと影辨慶の多いには閉口では御坐らぬかとの話し。大石等は固より田舍武士、一徹心氣狂の如く、類は友の世間を知らぬ田舍漢を集めて餓鬼の大將となり、吉良殿へ推參した心掛、まだアハレな處もあれど、一犬實を吠へて萬犬影に叫ぶ無我夢中の連中が忠臣ざた片腹いたし。

大忠は忠の名なし、大孝は孝の名なし、畢竟慶長武士の心掛が失せて名聞に心をくだく世の中となつたればこそ、忠臣義士なとと云ふ水くさい名も出る樣になつたとなり。世間一統義理堅ければ別段義理かたき人を褒るすじもなく、別段感心するすじもなし。現金懸直なしの看版に必らず懸値あり。それじやア本が切やすと云ふ商人に本が切れたためしなし。七重八重に膝を折りて御世辭云ふ愛敬者に油斷めさるな、山吹の實の一なきが多し。弱き犬は聲高し。やれ忠臣のやれ義士のとほめそやす時代に誠の忠臣義士は少ない者ぞ。大石など が猫のチヨツカヒ程の事いたしたればとて、今の世猶斯る義士あり誠に芽出たふ候ひけるとは、何たるたは言、それでも大學頭に任官された人の言葉と思へば腹も立つ、やはり世間に通用せぬ、タワケの證據に昔の通り坊主頭で居られた方がよかつたものを。

我思ふ所ありて大石に荷擔せぬ次第、忠臣ざたに眼のくらんだ當時の盲には言て聞せるもむだなりと思へども、馬の耳にも念佛と觀念して我方寸を明かすべし。全躰我等は江戶詰の士なれば主君あることを知りて公儀あることを辨へず、赤穗の城あることを知りて天下あることを知らぬ頑固一徹の困者とは口幅廣き言分なから少し逆ふぞへ。これを心得てよく心を丹

田に落付けトツクリと我言ふ所を判斷せば少しは分る奴もあるべし。必竟事の起りは藩邸の留守居役安井彦右衛門、藤井又左衛門の兩人、性來吝嗇にて、諸家交際の法を知らぬ白痴からなり。これは薄々世間でも知居と、そうなが。抑も江戸家老と云者は實は眼から鼻へぬける程の才子でなければ務らん役儀なり、天下の治亂は鐵砲に在り、家の治亂は女房にあり、女房が世事で固れば亭主たとひ苦虫かみつぶした樣な顔して居も、朋友にすてられずそれ故に内室とも内政とも云ふなり。國家老は大石でも不足なし、江戸詰の老臣に交際下手、ケチ、思案坊、氣がきかず、頓智のきかぬもの計りでは、世事變端がなくば思らしひ女房持つたと同じ事、それで家の破滅せぬもなくそれで國の危からぬもなし。吉良殿は何よりよい親類持つしやる故、御内證でも御苦ろふが、金の事は親身でもままにならぬが浮世、まして公家と商家は位だけれ、そこらを察したら殿樣は痩ても五万八千石の御知行取り、義理にも御附届あつて然るべし。况んや吉良殿は古老なり、殿樣は世に言ふ大名の子の世間知らず、萬事吉良殿の御引まわしは知れたと、賄賂なぞと思ふが野暮なり。師匠に謝物の禮すると思へば當然の事。それになんぞや、商家は斯る時に世話燒玉ふが御職掌、賄賂はいらぬとと馬鹿正直の申分、我此事をチラト承り早速安井屋敷に出向ひ、一休和尚の言艸によれば、曲りても杓子は物をすくい、すぐでも連木は物をつぶす、義と權との天秤を拵へねば世の網はわたられず、吉良殿へ附届あつて然可と樣々に諫めて見ても、馬鹿は自惚つよきもの。我が言ふ事に耳にもかけず、何の附が分を越へてのさしで口、默つて吉よと言はぬ計りの顔つき、せめて一人は濟度しくれんと、其足で又左衛門を訪ぬれば、折ふし出入の商人と御饗應のとにつき相談日時中心も氣も顚倒して我言ふとなど聞くべき景色も見へず、手を揮つてヤレうるさい、後日にござれゆる／＼聞きましよとの挨拶。我もガツカリとし、こんな氣のきかぬ家老持つた殿樣は誠に御氣の毒のことと不覺淚がこぼれたれど、椽の下の力持、詮方なし、そのときより士はいやになつた。

それよりアノ大變鐵砲洲の上屋敷は翌日に明渡し、五万八千石は棒にふる、其も是もアナがちに殿樣の御短慮計が起原でもなし、吉良殿の慾ばつた計りが、起りでもなし、ツマ

家老の氣がきかぬ所より起つた、双方のひがみがこうじた騒ぎ、是非もなし。扨百年此方君恩を蒙りし國武士が城地取上の無念さに城を枕と決心したも至極尤もの次第、さりながら吉良殿を敵とねらふは少々心得違なりと我は初より思ひしなり。其故は全躰城地取上と云ふ事、久しく聞へぬ沙汰、公儀に取りては非常の御英斷、これには少し深い仔細が御坐ろふ。今の公方は學問が御好き、此頃出頭第一でござる柳澤羽州の家臣、荻生惣右衛門と云若輩者チトの學問を鼻に掛けいやに高慢チキな事並べる儒者なども羽州屋敷に御成の時御前で御議論仰付られたともあつたと云ふ評判。して見れば随分と恐ろしひ將軍家なり、諸侯を一でも滅ぼせばそれ丈御威光の加はる次第との思召があつて淺野の家はまはり合せわるく其の貧乏くじ引たのかも知れず。其計りでなし、承れは將軍家はゑらい御寛大それ故御用大分多く常に御取入ては容易に引足らぬとのうはさ、先づ近年、新に御ふきかへに成りし大判小判二朱金を見るに其色眞鍮の樣にて光うすく眞黒のもあり慶長の古制にくらぶれば淺間敷ひ程の變化、武士はそんなとに氣がつかぬ者なれど商人共のなげき言盡し難し、商ふは言はねど餘事はさし置、此一事にて將軍家の御くらしも火の車は知れて居る。五万八千石沒收になればそれ丈のゆとりは當分付くことなれば小の虫を殺して大の虫をいかすと云ふ御詮議なしとも云へず。されば一向に吉良殿を仇とねらふは随分と見當違ひ、斯樣なからくりを考へて見れば大學殿の御取立、御家再興を願ふも無沙汰な事なり、吉良殿を一概に惡み申すも、喧嘩の相手に事を缺て弱い者いぢめる沙汰ではあるまいか。一層男らしく當の敵なる將軍家に弓を引き奉り城を枕に打死すればまだ誠に男らしき所置なれど、仇討は權現樣も御褒めにはならず、必竟は世を亂すはしなり、此度の事迹腹痛まず、無事に治つたのは飛んだ仕合。わしは是が天下爭動の源となりはせぬかと心配したが、世の中柔弱になり、大名も武士も昔の元氣うせたればこそ泣寢入ですんだとなり。晝アンドンとうはさされた氣のきかぬ大石たけ、滅想な荒療治ではあつたぞ。

もし誠の仇討をせんとならば將軍家を一刀怨みまいらするより外はなし。されど今の世にかゝる馬鹿を行なはゞそれこそ天下の破滅なり。それかと云ふて吉良殿に推參する程の理屈

七

もなし。それ故我は大石に一味せず、何も知らぬ家中の若者に、やれ腰拔よ、やれ馬鹿者よ、やれ不義者よと呼ばるゝたびに吾も士の家に生れた士の子なれば、〻〻よ世人皆醉はば吾も亦醉ふべし、世人皆忠臣ぶたを喜ばゞ我も亦忠臣になつて見せ申さんかと、不量見が起らぬでもなかつたが、否聞がほしい欲無謀の企に一味したと云はれては第一我本心に申譯立たず。死ても角ても死ぬるは命、棺の蓋してしまへばうるさくもあるまじと明らめて風に柳とさからはねば、己に目のない心から吾を水月の骨なしと思ふたわけ、其たわけにも増してたわけた奴は、大石と一所に吉良殿に夜討せなんだのが殘念じや口惜しやとて泉岳寺で面腹切つた馬鹿者なり。世間の奴もろひ忠臣好はやれいたわしや、氣の毒や、けなげな事よ、身は後れて仇討の場に間に合ずとも心は四十七士におとらぬ義士と褒ようが、わしの目より見ばこれ程さもしひ量見の士はあるまじい。義士君の仇討に後れたの殘念ならば何處でも腹は切れるなり、それに何ぞやわざ〱泉岳寺まで出掛るとは心の中がすき透る程の淺慮、必竟は吾も忠臣で御坐ると世間への見へぼうなり。死にまで水氣が有るとは扨て〱見下はてた心根、昔しの忠臣は君の爲にし今の忠臣は名の爲めにす。それを忠臣じや義士じやとほめそやす世上のうじ蟲を、分らぬ奴と云ふたのが間違か?。

○さる學校に歷史の講談を爲せる教師、偶々合衆國第一大統領ワシントンが軍略上、贋紙を造り殊更敵の手に落して彼等を欺きたりといふ事實に及び、生徒に向ひ左の如くに問ひたり。

ですが、ワシントンといふ人は子供の時に決して虛言を吐なかつたといふ名高い話し（櫻の木云々）があるじや有ませんか?。其點に付て皆さんお考へはどうです?。

一同當惑の色あり、軈て、この中にも最も年若く見えし生徒

先生・デモ戰爭の時はワシントンもモウ子供ではなかつたでせう。

○「皆さん骸骨といふのは何のことか知つて居升か?」と問へば幼稚園の教師、其の言葉聞いたことはあれど、判然解釋するは中々容易ならず、生徒皆頭を振りて何の答も出さず、其中四歲に滿たざる程の生徒。

しえんせい、アノ、肉のついてない人間じや有ましえんか?

叩扉

名優アンデルソン女史は、英國女俳優中の岡洲なりき、一たん人に嫁してホームの樂しみ浮れたる梨園の花の果敢なきに異なり、今や純然たる良夫人、賢主婦なり。譯者パルマルブゼツト記者と共に近ごろ其扉を叩き音づれける。

○其新家に於けるマリー、アンデルソン女史

名優マリー、アンデルソン女が「ハンプスチツド」の古寺院にて、アントニオ、デ、ナバロ氏に嫁ぎしは、過ぬる年の夏のことなりしと覺ゆ。其式日は極て深く秘め置て人にも多く告ざりしが、愈佳例のありといふ時、日頃名に聞しが天のなせる姿に裝粧の衣をひるがへしたる樣は何如ならんとて、古寺門前見る人山をなしぬ。是日渠の良人に付ては識れる者至て少なく、皆是好漢面相まさに南の方の士なるべしと思る而已にして、中には是デ、ナバロ氏の父といふは、元「スペイン」の產なれども氏は當地米國に人と成り極て英語に熟せりと語れるもありしとぞ。渠女が古今の梨園に跡を絶つといはれたる其ガラテヤの空き名のみを殘して、舞臺を後に捨たるは、是時にてありき。是より渠女に付て樣々の風評のみ聞しが、大率ね皆云く、凡そマリー、アンデルソン女程の藝能に妙なるものは、其舞臺に於て名人といはれし程、退いて其割に一家眷族の淸樂を觀得るものに非ずといへり。「タンブリツヂ、ウエルス」「パーテマウス」等にて、折々渠女が其良人に伴ふを見掛たりといふ者ありたりしが、渠等は共に世の常の知己朋友をば避勝にして、多は共に膝を交へざりき。爰に世の風評の足も立めれど、深き子細の有といふは、風雅の心も通ひ難き俗人のみ多く聚れる處に來らんより、妻は寧ろ夫と共にありて其うつくしき理想を他に映し見んことを希ひ、夫は又其最敬の婦女と共に消閑の樂をあわれみたればなるべし。

デ、ナバロ夫妻共に天資瀟達にして、萬事に拘泥ること鮮し。某の日、渠等某の處に遊りたりし折、罪もなき遊戲に餘念なかりしが爲か、四圍なる人々の嘲り合りしも、渠等更に意に介みしことあらざりしに、其頃室を隣にせる一女の欄を出て常に渠等の室を覗ふを知り、更に深く室內に退きて優遊常の如くありしといふ。婚後「ターンブリツヂ、ウエルス」の木深きほとりに瀟洒なる一家を構へ、爰を寓舍と定めたりしが、渠等始めて

來り住むや、兒童の新しき玩具を得て嬉戯するを見るに似たりといへり。其家財を賄ひ來りて之を備ふること、渠等が一方ならぬ容態の骨を折し、今迄は名も知らぬ勝手道具物品の日用具といふものにつき、日に新しき智識を加へける。其間、又渠等が共に樂みとせる小徑を逍遥徘徊し、相共に故山「スペイン」の音樂歌を學び、清夜には絲竹管絃の調にうかれ、或は隣家の友と膝を寛ろげて、斯て樂しく月日を送りける也。

「タンブリッジ、ウエルス」に於ては始よりこのダ、ナバロが一家を厚遇歡待すること一方ならざれども、渠等は之を謝退するの外なしといふ。若夫婦の日毎に、村外れの小徑に散する際に、小供が共に一種の誠に興味する無邪氣な笑顏のごとき姿を仰ぐべし。小供等は跡を追ひ、或は小供等が當舍に溢れる歌謠二三節を共に之を試みに遊ぶといふ。加之來人に立勝りて、土地の若きが向かりしなど、高踏を往返して高名の伶人に交を結べる丈は「クロケット」「テニス」の如き遊戲によりて智慧を磨るなど、かの諸事を引て俗談に傾くろより更に勝れるとを思はざらんや。

六月十七日の「タンブリッジ、ウエルス」に行きて、彼女と其良人とを山家の一室に訪れたり。余嘗て渠女が風評を耳にせしこと久しければ、心密かに之を繰返し、渠女は健康復故の如くならずといへば、沈吟地に落ちたるか、顔色蒼白ならんか、渠萬事を放擲てる無智卑鈍なる一村婦と成果たるにやと千々に想思を盡きたり。然るに今此室に入來る人は是即ち其想思中の人なることを知りて、渠女が天資のすぐれたるが上常に清氣山色を浴するが故か、其をもての極て健にして、幸福といふもの、風骨といふもの、更に躍如として眼中に溢るゝを見、世の風俗の常ならざるに驚き且つ喜びたり。渠が着たりしは、深緑の色を帯えしが、清楚の中に寓益なる趣を含みたり。余に其應接に接したるに、まことに渠女が曾てカッテヤの骨髓に入りて一代を風靡せしよりこのかた、余は復かゝる姿の世にもありとは夢にだに想はざりしなり。舞臺に於て、マリー、アンダルソン女を見るは名優として之をたのしむもの也と雖も、其新家に就て親しく彼が門を叩く時は、其人を動すこと更に前よりも多きを知るなるべし。渠生れて清楚天真宛も兒童を視るが如し。渠語りけらく、人は多く生れ乍らにして俳優に似たり、是悲むべき事實ならずやと。誠に女優の言

業にも似ず、其いふを聞くにつけても、藝能を學ぶの効により、かゝる無双の賢德を備へ得るものとせば、誰か之を學ぶの學ばざるに勝れるを思はざらんや。渠は今舞臺を捨たりと雖も、片時も渠が舊藝を忘るゝ事なく、或は所謂大家名人の臺帳に上りて復び梨園を顧みざるの虛構なく、或は空恐ろしき白眼を以て自己が過去の藝行を笑ふともなし。蓋し、渠は既に藝能に老たる也。心に泣かずして色に泣き、心に笑はずして色に笑ふは皆優人の常態なるに、渠は拍手賞嘆の間に於てすら、未だ曾て我演する人物の說明は我理想の境に徹せざるや否やと思省ざりしとあらずといへり。渠又靜に語りけらく、曆劇の結果を破り去る喝采は、常に渠を悲しましめしのみなれど、唯渠が心に喜びとせしは、滿座一面靜肅に變じて、凡そ水を打ちしが如くなる間に、時々叱叱といふ聲は賞嘆の諸聲にも勝りたりしとなり。誠に看客のみには非ず、共に臺上に立つ渠が敵手すら、渠を失望せしめしこと多かりしといふ。渠又言ひけらく、凡そ人の劇を見んとて行くや、深く其筋道を考へ、群優の一擧一動先づ心に之を定め置き、斯く心目を一にして劇場に臨むものなるが故に、其身は客座の間にありと雖も、心は群優と共に舞臺の上に彷徨はざるとなし、故に一と度家に歸らば、精神憂鬱疲勞を覺え復び立て劇に臨むの力なき也とぞ。看る客にして斯の如くなれば、心ある優人の苦腸更に推て知る可き也。渠が舞臺にあるや、常にかゝる苦心の境にありたれば、身軀漸く衰ふるを悲み、遂に全く梨園を去りたりし也。

良人は渠の復び劇裏に入るを悲まずといへり、且氏は、風雅の志に厚ければ、渠が藝能の意匠に付て同感を表すること多かる可けれども、渠女は今梨園の社會と隱逸なる山家の生涯との間にありて、斷然前の者を捨て、後の者を撰びたるは、こゝに無限の樂みのあればなるべし。

ウイラード女史が名け多きうちの金言を集め、語ばによりて女史自から其衷情を吐露せしめ、宛から其人物を見るが如き「獨語」を次號に揭げんとす。

女學史料の一欄新たに加はり、次號より紙面一段の樂しみを加ふるなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小説

流の葉

第五節　油　（中）

是　空　子

「ホンニ、いつも元氣の好いよネー、」と無量の意を含ませ、見返り乍ら羨やましげに批評する姉娘の顏を、安は、不審氣に見あげ、

夫とお較べ申すゆへか、あなた樣の近頃の御樣姿、メッキリお痩せ遊ばし、誰がお見上げ申しても大相のおやつれ、

なほしげ〳〵と見凝めながら、

お頬の邊り……不禮ながら一寸とお手を……それ！、此のマアお痩くお成り遊ばしたと、今年の正月、歌がるたを遊ばした時とは、餘程の御變りで御座いますよ。

見凝めたる眼に、ポロリ涙を落し、まぎらはして傍に向ひ洟をかめば、嬢は亦手早く眼を拭ひ、

ナンノ、お安が、また大層に言つて人をビックリさすよ、私しは夏になると、いつでも痩るじやないか、お前知つてるくせに。

それで御座いますと、安も御心配は申上ませんが、御嬢樣、キット居直り、

何か御心配がをあり遊ばすに違ひ御座いません、ナゼ私しにお隱し遊ばします。

ナニを、お前に隱しますものか、今日はその事を話したいと思つてた所だよ。

ほゝえみ乍ら涙ぐみ、

怒るほど私しの事を思つてくれて有がたいよ。

ワット泣伏し、こらえし涙のせきを一時に開き、のみ込み、しやくり、やうやうに、

御心配申し上げないで何んといたしましやう、私は家も兄弟も何んにもない棄子……奥樣のお蔭でお邸に育てゝ頂き升て、お嬢さまとは小さい時から懇々のお友達……奥さまがお無なり遊ばしてからは、アナタが居らつしやればこそかふしてゐる樂しみもありますものを……

雄々しき心もさすがは女氣の、情けに滿ちて譬は出でず、無限の愛を僅かに涙にして漏すのみ。嬢はすりよりて、安が泣

伏したる肩を撫で、
ホンニ、思へばお前と私しとは姉妹も同じとだチー、此からもその積りで居ませうチー、お前こそクヨ〳〵おしでないよ、お前がもし煩らひでもしたらどうしましよう、姆も病身だし、お前、しつかりして居ておくれよ。
ハイ。
アノチ、私しが心配してるてのは、外の事では無い、ヤハリ、いつかの結婚の事だよ、お父さまがとう〳〵締めてお仕舞ひなすつたノ。
チヤツ、
と叫びつゝ居直り、眼こを据へ、
　左樣ですか。どなたにお極めなさいましたり。
横濱の商人で、川上魁とか云ふ人だそうです。
アナタは御存知で居らしやいますか。
少しも知らないノ。
餘りお邸へもお出のない方のやうで御座いますネ。
極く近頃ろ父樣がお知り合ひの方だそうで、いつもの御氣質から急にお氣に入つた人と見へる、熊はだふして知つてるか、大層恐ろく言ふよ。
熊の申しますとは當になりや致しません、が、丸でアナタが御存知ないお方では、定めし平生のお考から御不承知に思し召すとで御座いましやう。
夫に大層お酒を召し上つて、品行も好いとは言へない方だ相で、第一御商業を爲さる方では、迚も私しには適さないよ。
左樣ですとも、お可愛相に、アナタがどういたして商人風情の、
イエ、商人が卑しいと云ふ譯は少しも無いがチ、結婚は性の合ふ適したもの同志でなくては、迚も幸福はないよ。
夫に私しは信仰する所ろがあるから。
旦那樣は夫を御承知でしやうか。
少しは御存知だが、心に信ずることは構はない、たゞ洗禮を受るなと仰やるのだよ、洗禮を受ると緣談に差支へると思し召すからのとサ。
左樣で御座いましやうチー、敎の善いと云ふとは、十分御存知なのですもの。夫は左樣といたしまして、アナタは何

んと御返事遊ばし升た？

どうも存じない方のよではあるし、父様が定めし十分御聞遊ばして、上が上までお考へなされてのことは存じますが、あちらでは少しも私しを御存じなくお取きめあるは、少し御軽卒かと思ふ、夫故今少こしお待下さいと申したの。

夫は能く仰しやいました、夫なら、アナタ、何も御心配の事はありません、キット好くなりますよ。

ダカラ、何も心配はしやしないワ。

懸念がはに、迎へて拚ずるを、安はきかず、

イヽエ、其外に何かお心に掛ることが有に違ひ御座いません。

非道い疑したよネー、何も心配はないよ、コンナに気楽じやないか。

笑つて見する笑は、仲秋の月の如く、さやけき中に曇りがちなり、打笑める口元は木陰の朝顔に似たり、聞かんとして亦忍む。

御心配がなきやア夫ほど結構な事は御座いませんがネ、アナタ、マア、いよ〳〵と云ふ所はどふなさいますお積り。

ダッテ、今では分らないから。

サ、分らないと仰しやるうちに、御決心が御座いましやう、アナタは外にお愛し遊ば………アノ、其方とお合ひ遊ばさないに違ひ御座いません。

夫は、マア、あまり好まない方サ。

アナタはお進み遊ばさぬ方で、旦那様は是非遣ると仰しやつた時は？。

サ、其時の事サ、どうしたら道に適ふものか、自分の所欲は拋捨き、正しひと思ふことが為たいからネ。

左様ですとも、いつやらの女學雜誌にも見へましたネー、愛せざる人に嫁ぐは娼妓が身を売るに同じく、己れの不幸は言ふに及ばず、第一不徳なり、己れの不徳は言ふに及ばず、彼方の人に不信切なり、愛せざる心を結び付けて其人の一生を苦めしむるは、恰も引臼を人の首に繋ぐが如し、とかありましたつけ。

よく覚へてるネー、ダガ、ホンニ左様だよ。然し父様は私しの為をお考へ下すつて、私しに好かれとて為さつて下さることだから、決して悪いとはなからう、が………

夫は左様ですとも、たゞ性質の合ひせまん時は悲しいとが起ります。

と、娘が言はざる心を代りて言ひける。

苦患の鎖　（其三）

ひさご

松「マアよくきて下さつたと、とゝへズット入らつしやい、さし合なんぞはないのです

廣「敷居が高くて上がられないのですが、あんまり淋しいので

松「何、廣子さん、私しに遠慮がありますか、私しもわかれたのです今は自由の躰です

廣「そんなとを伺がひましたが御心得違ひです、年若お女の獨居はろくな事はありません、手後れに成といけないから早く御かへりなさつたらいゝでせう

松「をかしな事をおつしやる子、今がモウ手後れなのですヨ、あなただつて亭主といふ佛閣の偶像みたやうなものをもつたじやアありませんか、むやみやたらと妄信して拜んで斗りゐたらいゝでせうが、少し教育でもうけたもんがさう蹐まつて斗りゐられるもんですか、私しなんぞホントに伸々しましたヨ

廣「それもさうかしりませんが、私しは學校にゐた時から約束して氣心もしり合つたに、今になつて色々やかましくいはれるのです、私くしの友達の交際を斷はれなんていゝますの、私しには一人の人に斗りくついてゐるといふとは出來ません、かういふとをかしく聞え升が、さうじやアないのです、友達といふものは其むき〳〵で友とする所があります、私くしは或一部分を友として、其一部分に對しては隨分それ丈に盡力するのです、まして夫は友の大きなんじやアありませんか、他の友に交際したからといつて、夫に對する愛がへるといふ譯は決してない筈です、わけてもくれても二人鎖でつながれたやうにしてゐられませうか、書物でもみないものなら比較的の考へがないから、ともかく、目や耳は四方に走つても、躰が自由にきかないないおんていふとは無限の地獄です、人間の生涯は同じ事に安んずるもんじやアありません、とゝに安んずるやうじやア進歩しますまいとおもひます、かういふ風な自由といふ樂園を知らおいやうな、知ていても自分一人で其空氣を吸てゐるやうな人は、ほんとの戀愛おんていふ

事をしらない譯です

松「ホンニさうです、私くしはだれか私しに反對して、私くしの考がちがつてゐるとおもはせてくれるとい丶とおもつてゐますに、あなたも同じやうなことをいつていらつしるのですチ

康「ですけれど、理屈は理屈ですが、私くしはチットしすぎた所があつて、今世の中にいろ〳〵いはれてゐます、いまにわかりませうが、松子さん少しの間でも損ですから、人の口端にかゝらないやうになさい、さうして成べく早くもとへおかへりなさい、中々あの位の方はチヨットなし、もと〳〵愛していらつしやつたのですから、こんなになつたもと丶いへばあまり仲がよすぎたせいです、これ丈御忠告にあがつたのです、さやうならと立歸りぬ。（未完）。

故老人の曰く、夫婦は時々一二日離れて手紙のやり取すべし、三度の御飯も一度やめて見て飢さを知ると。

兒籃

小公子

第十回（乙）

若松しづ子

アノ、かあさんがネ、さういつたんです、大變金持になるのは、そう、容易ことじやなかろうつて、自分が始終、いろんなものが澤山あれば、外の人はそんなに運が好くないつていふ事、時々忘れるだろうつて、ダカラ、お金のある人はいつでも氣を付けて、人のこと考へなくつちや、いけないつて。僕はお祖父さんが大變、人に深切だつて話してたら、それは結構なことつたつていひ升たよ。ズモ、侯爵なんていふものは、大變な權力があるんだから、自分の樂みのこと計り介つて、領分に住つて居る人のこと考へなければ、其人たちが困つて、自分が助けられるとでも、知らずにしまうだろうつて。ダケレド、人が大變大勢居るし、隨分六ケ敷とつたろうと思つてるんです。僕、今あそこいらに澤山ある家見て、僕が侯爵になつたら、あの人たちのこと、知れる樣によく辨ねなくつちやいけないつて考へてたんです。お祖父

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

さん皆、どうして、みんなのと知れたんです？

侯爵が小作人どもを知つて御坐るといつても、誰々が年貢を滯なく納め、誰々が納めぬといふ丈に止まつて、納めぬ者は早速、引立るといふ都合になつて居升たから、此問には容易に答へられませんかつた只それ故ニューウィックが探報するのだ」と仰つて、白毛の八字髯を引張つて、心わるそうに、質問した小さな小供を見詰めて入つしやい升た。それから又「サア、モウ家へ歸ろう、そうして、貴様が侯爵になつたら、をれよりも上等のにならんじやいかんよ」と仰しやい升た。

侯爵は歸り途にも沈默でした。生涯に誰をも心を盡して愛したとのないのが、今はさまでに此小息子に執着するとはと、自分ながら、不思議に思はれる樣でした。最初は先づ、セドリックの容色の好い處と、凜然とした風采が氣に入り、人に對して誇る丈でしたが、今となれば、どうやらそれ許りでなく、外の情が雜つて居つた樣でした。よく〳〵考へて見れば、自分はいつでも此子を側へ引附けて置き度く、其聲を聞くのが何よりの樂しみで、他愛ない子供と知りつゝも、頻りに其心が得たく、好く思はれ度のが胸に一杯でしたが、かふ思ふ度に、我と我心が可笑くなり、人知れず、彼の譏さうな微笑を傾けて居られ升た。

心の中に「おれもよく〳〵年をとつて子供がへりがしてしまつたので、他に考へるとがなくなつたから、必竟かふもなるのだろう」と思ふて見て、復まんざら、さうでもないと考へ直され升たが、モ一層、心に立入つて考へて見升たらば、其子供の性質の中で、一番に氣に適つて、我知らず、引つけられる樣な心持のするのは、自分には缺て持つたとのない德、即ち取繕ひなく、優しい眞心のある處と、人を信じ愛して、決して其惡しきと思はぬ處だといふとが分り升たでせう。

これから丁度一週間ほど後のとでしたろう、セドリックは、ある日、貧民を訪問して歸つて來て、困つて思ひ沈んだといふ顏附をして、書齋へ這入つて來升た。始め此城へ到着した時、腰をかけた、彼脊の高い椅子に寄つて、暫らくはたゞ暖室爐の中の火を眺めて居升た。侯爵は何事かと思ひつゝも、また物を言ずに、其顏を眺めて居られ升た。セドリックは何事か深く考へて居たといふ丈は明かでしたが、やがて、顏を擧て、

アノ、ニューウィックは、皆んなのこと好知つてるんですか？

侯爵さまは、

さうだ、それがあれの職掌なのだ、何か困つて居ることがあるのか？

此小息子が管轄の小民どものことに注意して、彼是労はる様なことほど、不思議に侯爵さまのお氣に適ひ、又實際お為になつたことはないのでした。自身にはさういふことに注意なされたことは少しも有りませんでしたが、セドリックが他愛なく、幼な遊びに屈托して、餘念もなさゝうに打興じて居る中に、而かふいふ眞じめな考へが、其ちゃい頭の中に働いてゐるとは、これも亦一興と思はれたのでした。

フォントルロイは、大きく眼を見張り、恐ろしくてたまらぬといふ顔付で、

アノネ、村の向ふの外れに大變な處があるんですと、かあさん見て來升たと、家なんかどふも、くつゝいてゝ、丸で倒れさうで、息がつかれない様ですと、それから人がみんな貧乏で〱、大變ですと、熱病なんか度々あつて、さうして子供が死ぬんですと、それから人がそんなに貧乏で、苦んでると、段々悪い人になるんですと、ミチェルだのブリヂットだのよりか、猶わるいんですと、そうして屋根から雨がドッドッドット漏るんですと、かあさんがそこに居る貧乏なおばあさん、見舞に行つたんです、僕、行つてたら、自分が歸つて來て、着物をみんな着替へるまで側へ來させないんですもの、それから、その話しゝて居た時、かあさん、ボロ〱泪流してるんですもの、

フォントルロイは今此話しをしながら、自分も泪ぐんで居升たが、泪の中に又ホヽ、笑んで居升た。

僕ネ、おちいさん知つて入つしやらないんだから、行つて話して上るつて言つて來たんです、と言ひながら、飛び下りて、侯爵さまの椅子に寄り掛り升た。

そして

おちいさん、みんなよく出來るのネ、アノヒッキンスのこと、よくして下すつた様にネ、いつでも誰でものことみんな好くしておやりなさるんだもの、ダカッ、僕、かあさんにさう言つたんです、ヂ、ニューウィックがキットおちいさんに話すの忘れたんだらうつて言つて來たんです。

侯爵さまは自分の膝の上に載つた手を御覽じ升た。ニユーウィックは實際其話しを申し上るのを忘れた譯では有りませんかつた。今フォントルロイの話しの村外に、俗にエールス、コートといふ處の如何にも廢頽して居る有樣のとを申陳ずる爲に、一度ならず、足を運び升たのでした。それ故、傾むいて、見る影もない長屋のとも、打捨てある下水溝のとも、濕氣でジミくした壁や、窓の破れて居る所も、屋根の漏るとも、貧困極まるとも、熱病のとも、一切の難澁を知り盡して居られ升た。モドント牧師は、言葉を盡して、其情况を陳じ訴へたとが有つた時に、老公は亦それに對して、亂暴極まる斷言を成され升た。そして殊に御持病の悶煩の烈しい頃には、其エールス、コートの人民どもがみんな死に絕へて、地の下へ埋まつた方が結句世話なしで好いなどと放言されたとさへ有ました。然るに今、膝の上の少さな手を見、それから、まじめで、正直で、眼に天眞な處を現はした顏を眺めるに付て、どふやら其エールス、コートのと、又自分のとが、恥かしくなつて來升た。

ナンダ？、貴樣は、おれに人の見て雛形にする樣な貸家を建させようといふのか？

と言ながら、今迄になく、子供の手の上へ自分の手を載て、おもちやにして居られ升た。フォントルロイは、大層熱心に、

今の家はみんな倒してしまはなくつちやネ、かあさんもさう言ひ升たよ、ア、おぢいさん、あした、二人で行つてみんな崩させてしまいませう、ネイ？、みんなおぢいさんが行けば、どんなに悅び升か！、ダッテ、おぢいさんが助けに入つしたんだと思ひ升もの！

と言ひながら、話しに身が入つた故か、眼が丸で星の樣に輝き升た。

侯爵は倚子を離れて、子供の肩の上に手を載せ、「ムフ、、ッ」と一聲笑ひながら、

サア二人で外へ行つて椽下を散歩しよふ、そこでスッカリ話しをつけるとしよう。

それから、天氣の好い時は連れ立つていつもこゝで散歩する、例に隨つて、廣い石造の廊下をあちら、こちらと往來する中に、二三回もお笑ひなさい升たけれど、何か氣に適はなくもないお考へをなさつてゐる樣子でした。そして、矢張り、少さな合手の肩の上へ手を載せて入つしやい升た。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

冬向洋服のつくろひ

石翁

秋風立ち、衣を更ふる頃とはなりぬ。ミセスさん、どうか袷のコートを出して下さい。ハイよ、と言つて出して見れば、襟にはシミだらけ、胸のあたりにはペンキか何かのあと赤くみにくくは付きし。主人、プッとふくれて不平なり。夏中ようく拵つて干して置いたんですが、どうしていしようと、タヾの言譯は役には立たず、早く其シミやペンキを除いて呉くが肝要なり。いざ外套を洗ふは行かずとも、是より外出せんとする時、衣物の用意の出來て居ぬほど難儀の限りはなし。

シミを除くには、瀝青油にふくませて拭き取るが最も手早く、但イ洗濯屋の水(ドライ、クリーニング水)を買ひ、其液の上に塗りて居る間に、手にて拭く取るなり。シミは不思議に落つべし。其ついで金あり。但し油のシミには未だ試みず。

又ペンキや漆の附たるには、石炭油をつけて拭く取るべし、是亦不思議に落るなり、ラシヤの洋服にても、銘仙にても同じとなり。石炭油に依つて除くるタッて仕ふ前へ拭ひかけ置けど、もし心配なれば、布を敷いて火のしを掛くべし、直ちに香ひ失せるなり。

○炭にさまぐの用あり

吉田伸子

もはや炭の戀ひしき時節に近づきぬ。今こそ其勳功を數へ立つべき時なりけれ。イザ、

けし炭の細粉は、琺瑯質を損ずることなき、最良き齒みがき粉として用ひらる。

止むを得ずして、濕地に住するときは、炭を俵のまゝ、床下に入れ置く可し、惡疫の災を避るに足るあり。

用水殊に低濕溜水を、炭にて漉し用ふるときは、其中に在る汚穢を去り、良水となるなり。

赤砂糖の液を、炭にて漉し、再び結晶せしむるときは、白砂糖と変るなり。

炭火の粉にて、金屬製の器物を、磨くときは、質を損り減すこと少くして、容易に美麗になすことを得るなり。

雪隠の周囲に、炭を多積置けば、惡き瓦斯を吸收して、衛生上大に益あり。病院や傳染病室に、多く炭類を置くも、之と同一理なり。炭が臭氣を吸收する割合は、一様ならず、便所等より

發出する、アムモニヤの氣を、吸收することは、自己容量の九十倍人々が呼出し、或は燈火、火爐等より出る、炭酸氣を吸入するは、三十五倍なり。又火鉢にて燒に、不便なる炭の粉は、甚だ細粉となし、惡臭を發する個所に、散布すべし、臭氣留の代用を爲すなり。

炭片にて、皮膚を、摩擦するときは、穢れたる表皮を容易に去り得べし。

炭片に小孔を穿ち、其中に鑛物を、細粉になしたるを入れ、燈火を吹き入れて、燒ときは、其鑛物中に含む金屬を、見出し得べし。

雪の降る日に、赤き炭一片を、丈夫なる糸に吊し、積雪中に投げ入るゝときは、雪は炭に吸收せられて、炭の周圍に附着し、小兒の爲めには、面白き雪釣り道具となるなり。

炭を細粉と爲し、硫黄及硝石に混じ、火藥を製すべし。

○新發明品 手桶湯わかし

冬となれば、お三の台所用にも、緣側杜戶などの掃除の用にも、水を氷らさぬほどにして置くにも、病人の脚湯用にも、此の手桶湯わかしは適するなり。經濟の事に注意ふかき經濟雜誌は、之を評して云く、

手桶湯わかしは女學雜誌社の發明に係り、少許の炭火を以て暫時に手桶一杯の冷水を熱湯たらしむるを得る、至りて簡便なる器械なり、故に之を家族多き家に用ひば却て不便なるべけれども、少家族の家に於ては極めて便利にして、先づ第一に細君の勞動時間を省き、第二に臺所元の入費を節減すべし。

隨感

假聲

シオンの山人

中秋の月は風起り雲暗なり雨さへふり出づるが多き例しなればば今秋も亦さありなんと心私かに失望の浮雲に掩はれて西風頻秋月淨如練雲生一夕不見月變日如失明と唐人が言る愚痴さへ想ひ出され居たりしが果せるかな夕まぐれの空模樣何となく面白からざればいよいよ一年の良期に背ける心地していと本意なく思ひつゞくる程ともなくふと窓に映れる庭松のかげ是は何事ぞと窓おしやり見れは玉顏新裝の佳人滿面に笑みを含みて雨の扉を打ち開き雲の衾を蹴へしてぞ立ちにける嬉さ上野あたり逍ひ一友と共に手をとりて湯島を下り不忍の池の畔に出でぬ大學の高き館のありありと見ゆる上野の森かげの

二一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ほのぐらき或るは池の辨天の社さては蓮葉を渡る風のかくばしきおんど得も言はれぬ光景に心うかれて居たりけり折しも松源にやおらん樓上の紋喫とみに止みぬと思へば樓下直に聞ゆる役者の假宿元より劇通にあらぬわが身果して某の假宿なるや否なりや或は掘き、いかにしてか知らるべき然はあれど其わざのいと賤しきさまに思はるれば友に向て

逞ましき一個の男兒役者の眞似をするとはそも何事ぞ夫の木贋なる俳優其れ自身すら忠臣の冠を頂だき義士の劍を攜ひながら其心ざまはいと醜にくきこと言はんかたなく數の風に浮の種を蒔き散らすこと幾許ぞそを眞似るとは……

友人は聲を勵まし且つ冷然として答へらく

君よ怪しむ勿れ今や其衣帽を紳士となし其言語を學者となし其擧止を才子となし其內には毒を滿り其者には術を満らす而して其眞相を看破し來れば其腸には殘忍の戈を構たへ其胸には不義の刄をとぐ故に一旦事破るに當てや身を滅す閒國の人となり大山師大詐僞者の傳記を介りて見るゝ者其幾許ぞよし不幸に(?)其馬脚を露さゞる者なりと雖も其名聲所謂否至腑所の役を打破し來れば世間此徒滔々にして堤を決するに異らず何ぞ必しも彼匹夫のみとむるを用ん。

余啞然として大に笑て曰く

是也是也身を窮に詰ひて而して猶は且つ妻妾に誇るもの昔時の唐人の空言ならん。

忽ち見る雙影落ちて地に明かなるを仰て天を望めは則ち清風雲を掃て嬋娟更に人間を冷笑するものに似たり。

文學

池袋清風大人批（登山子第一社中）

夏草

高原

、蒲原ほにもいつへくなりにけり下ゆく水は音のみにして

江間

、夏深みしづか庭は草生ひてやれしまがきは見えずなりけり
（山さとは叟）（深く茂り合ひて）（根も）（ぬ頃かな）

山口

、しけるともぬかでやおかんあさ路の光すゝしき庭の夏草

神谷

、しげりおふ野中のみちのよもぎ草駒のおとだにわかずもなるかな

評 小出すなら依さでもいはなくては

新竹

市村

：しげりあひて月だにもれぬ若竹の陰は中〳〵涼しかりけり
（繁りあふみ）（も）（りくろ）

評 若竹は叢竹の如く茂り合ふさしもいはれず

市村

○五月雨の晴れし夕の風にてそまどの若竹さわきそめけれ
（うら）（そよ）

評 風向ふ新也

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

○維新豪傑談　　撫泉子

西村天囚居士が著なり。十篇に分ち、維新風雲の際の健兒勇婦が逸事を記す。文章盛衰記の躰に倣ひ、雅致ありて面白く、記事亦往々にして新らしきものあり。殊に好丈夫と題したる平野國臣の一章は分きて詳傳と記るし、世に聞えざる歌ども多く記し付けたり。但だ些細の出來事を細かく筆して、人物風采を寫せるとの粗なりしは、殘惜しきとなり。觀音堂と題したる梅田雲濱が逸事の中に、其妻上原氏が事を叙す、蓋し夫妻貧に窮し京都詩仙堂の片邊り無住の觀音堂にわび住ひせし折の事なり。妻の歌に、

冬枯の軒の妻木もたきはてゝ庭に落葉の積る間もなし。

夫も遉かに浮世の哀れ身にしみて坐に感慨を催ほしけるを、憖じいに良人に物を思はせじとて、重ねて詠めりし歌に、

こと足らぬ住居なれどもすまれけり
我をなぐさむ君あればこそ。

此等の佳話は讀む人を感歎せしむるに足るなり。

○幼稚園切紙　　響泉女史

日枝幼稚園の所撰にして幼兒教育上有益なる繪紙なり。フレベル氏の撰定せられし二拾恩物のみにては毎にもの足りぬ心地する折から此類の玩具の世に出るは悦しきことなり。彩色並に撰擇に就て考ふるに幾多の經驗を重ねし人の手に據て成りしものなるや疑ひなし。されど大小の對稱に至りては遺憾なしと云ひ難し。我兒は第六號の魚類の繪を指頭にてつゝきながら評して曰く此ふなの上の魚はたなどかへ……其他第四號のあんずの彩色、第九號のへびの圖は他に何とか意匠はなきものにや。

新誌一覽

○日本の花及園藝

御庭技師ジョシア、コンデル氏英文にて題名の書を著はし、横濱のケリー商店より賣捌く。メール記者之を評して云く、日本は四百年の間だ精密儀式に於て尤も發達したる國民なり、而して茶と花と花つくりと、三のもの相列びて進步したり、又花及園藝の遊技が人心の上に及ぼす所ろの感化は、單純、率直、質素、小事物に於ける愛、尋常自然の事に於ける嗜好を獎勵して、奢侈、競爭、珍奇寶玩などの情を抑ゆるにあり、此の感化は決して少なからぬもの也云々と。

○日本正教會史料

正教新報の近號に屢々掲載する同史料は、啻に同教會の歷史を示すのみならず、西教の御國に入りたる經歷を寫し、面白く且つ有益なり。

時事

○鐵道買上

國家主義の本性いよ〳〵現はれ、鐵道買上の議は正に輿論となり、放任主義の經濟雜誌も、個人主義の自由貿易論も、大方は不同意なきものに似たり。されど、斯の如きは取捨して行ふべきものにあらず、[illegible]くの[illegible]財務の上の事となるべし。

○品川氏

新聞紙が品川氏を評するものいよ〳〵酷烈なるよし、而して其風は下に吹くのみならず、此頃は益々上にも吹くよしなり。記すべき事と云ふべし。

○[illegible]

南洋を經略せんとするものあり、支那朝鮮に渡航せんとするものあり、北海道に移住したるもの既に[illegible]あり、バルカン半島に遊びたるもの既に堂々たる策あり、日本人は膨脹して南洋群島となり、國粹は東方策となり、信仰も內地雜居論となりたり。[illegible]の追々と廣くなるは日本[illegible]の吉兆なり。

千里を見んとを欲する者は先高きに登らずんばある可らず。

○秋

新聞記者は云く、新聞の不景氣少しく回復したりと。宗教家は云く、毎年の復興は九月十月以后にありと。政治家はもとより十一月近づくによりて忙わしく。學生は正に此季を以て最良の學期とす。秋はたゞながめして悲しむ時にあらず。

○政務部

未だ生れざるに墮胎せしよし、必竟姦婦生生壯健ならざるに由る。あゝ何事も脆きもの哉。一書生云く、天下を動かすと斯の如く容易なる乎と。平の難盛君、君もし實相を觀ぜんとならば、新聞官內排斥を[illegible]、青年生策々の狀をそつと窺ふべし。

○狹地少人

日本は廣き國と思ひつるに、此頃は追々狹くなりぬる心地せり。日本には人物多しと思ひつるに、此頃は至つて人少なになりぬる心地す。されば年毎に住ひ、新聞紙を好く讀み、所謂今の日本に出でたる人の缺乏なり。新聞紙にて土地を廣めるか、移住するか、又丈夫にして子孫を增すか、內地雜居にても許さずば、日本はいよ〳〵狹地少人を感ぜん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通信

あい子編

●門田くり女史　滋賀縣尋常師範學校助教諭たりし同女史に、今回高知縣尋常師範學校助教諭に任ぜられ、本月十一日より授業に從事せられたり。

●高知縣尋常師範學校女子部　本年に於ける新入生中、第一種即ち郡市長の選拔に係る者十三名、第二種即ち入學試驗及第のもの九名なり。

●同縣尋常中學校女子部　本年に於ける新入生は二十八名なり。

●中村千賀女史　東京渡邊裁縫學校卒業生、東京市小學高等科裁縫教員たりし同女史は、今夏歸省せられ、高知市に女子手藝傳習所を設立し、和洋服裁縫及び編物造花刺繡等を教授せらるゝ由。（以上高知通信）

●宮城女學校　同校にては、今般大改革を斷行し、諸學術は邦語にて教授し、國語家政等は實用に適することを旨とし、教員もそれ〳〵の專門家を招聘したれば、大に地方の好評を博し、今學期に於ては十數名の新入生を得られ、職員は、校長リゼー、ブルボー女史、幹事、藤生金六氏教員、エマ、ブルボー女史、龜山貞女史、菅間保藏氏（大學古典講究所卒業生）及び外數名なりと。

●宮城修道院　は先日佛教を女子に授くる學校なりと報ぜしは間違にて、同校は、女子尋常普通の教育を授け、尚孤兒を育する目的を以て起れりといふ。

●宮城師範學校女子部　にては、今回預備科を設けんとて取調中（以上三件仙台通信）

●札幌女學校　同校は、小學校卒業以上の女生徒を教育するところにして、職員は校長及外一名の教師を除くの外十名計は皆女教師にして、東京又は函館師範學校の卒業生なり、創立の頃女教師間の面白からぬ風聞も跡をたさめ頗る評判よし、其內過半は基督信者なり。（北海道通信）

●横濱市內　は濕風益々盛にして、待合、洋酒一杯賣、揚弓場など、日々其數を增し、晝夜の差別なく通行男子を呼ぶ、聲高物市の賑々に劣らず、殊に洋酒一杯賣俗に「チヤブヤ」は、甚た猖獗を極む、其數二百六十三ありて、市內四十七ヶ町に散在す平均すれば、一ヶ町五軒五九余の割合なり、久方町の如きは一ヶ町にて五十三軒の多き軒を列ねて之を業とす。

女報

あい子編

●皇太后陛下　には尚日、孝明天皇御陵御參拜のため、京都へ赴かれたるが、御座所は多分、皇后御所へ入らせらるゝならんと承る。

●皇太后宮陛下の御寄附　全陛下には御親織の織物にて御打敷を作らせ玉ひ、京都泉涌寺靈明殿孝明天皇の御尊牌奉安の須彌檀に御寄附在らせられたるよし。

●皇太后宮陛下供奉の女官　全陛下京都行啓の供奉女官なりとて、京都の或る筋へ御內報ありたるを聞くに、典侍萬里小路幸子、掌侍中御門隆子、全吉田滋子、權掌侍吉見光子、全松室琿子、命婦鴨脚八十子、全生源子、須賀子、外女兒五名なりと云ふ。

●允子內親王殿下御移轉　允子內親王殿下は、昨十五日麻布市兵衞町一丁目十四番地御養育主任子爵林友幸氏拜借邸へ御移轉あらせられたり。

●女皇の優待　佛國艦隊は、八月十九日を以て英國に着せしが、同艦隊司令長官其他乘組將校は、翌二十日英國皇宮に到り優待を受けたり、又同夜女皇は特に右將校等のために、皇宮に於て一大祝宴を開かせられしが、司令長官は女皇の左側に、大使ワッヂントンは其の右側に着席し、交々立ちて英佛兩國間の交情の厚きを賀せりと云ふ。

●天野若圓氏　甲府にて發行する「鷄鳴」と云へる雜誌の第八號に娼何等の目痴でされし天野若圓が娼妓を身受けしたりとて醜坊主云々の烈しき評を與へたり。

●千葉縣の廢娼論　大ひに起らんとし今年の縣會には是非とも全廢論を通過せしめんと準備中のよし。

●婦人協風會　去十六日番町教會堂に於て今年會を開き、會頭淺井さく女史病により辭退の件を議したるが、尚强ひて勤續を請ひ當今改撰せざることに決したり。

●石川ます女史　千葉居住の石川增（鬼頭氏）女史は此度上京し當地に居住せらるゝとなりぬ。

●甲府英和女學校　の新築漸やく落成し來る二十八日より開校する都合となりし由。

●婦人衞生會　同會の役員改選既に畢りたれど尚ほ辭退する人ありて確定せず、但し會頭副會頭は元の如く幹事に多少の變更を見るなるべしと云へり。

●同志社女學校の入學生　同校にては、本年は人員を定めず入學生を募集したるが、應募者は案外に多く已に入學試驗を終りたるもの頃日までに十五名あり、尚ほ遲くれて申込みたるものもあれば、都合二十名に達する見込なり、左れば本年は、昨年僅に六名の入學生ありしに比すれば、稍々景氣好き方にて、在舍生徒百餘名となるべしと云ふ。

●山縣夫人　兼て大磯の別邸へ避暑の爲め赴き居られたる山縣伯の令夫人及び家族數名は一昨日午後歸京

●女髮結の取締　女髮結は、他人の家に出入して親しく婦女に接するより、種々の所業を補助する等、悖德瀆俗の所業多ければとて、其筋にては、之が取締を嚴重にせんと目下取調中の由なるが、府下の女髮結中古老の者は早くも此弊を除き

且同女教濟の法を設けんため、組合創立の事に決し、不日其筋へ出願するといふ

●淫賣取締の方針　密淫賣婦女の取締方に就ては、今度大に法を嚴にし初犯は十日以内の拘留に處し再犯者は一定の遊廓内に居住せしめて他に出るを許さず二犯以上は公娼と見做して娼妓同樣の處置を施し其業を營むと否とに拘らず檢黴を行ひ且つ賦金をも徴收することゝし警視廳にては近日其取締規則を發表する筈なりと聞けり。

●辭令

●皇太后宮御用掛仰付　宮中顧問官　橋本綱常

●皇太后宮職御用掛仰付　皇太后宮大夫子爵　杉孫七郎

●女子高等師範學校主事を命ず　女子高等師範學校教授　篠田利英

●高等師範學校教授後藤牧太、法科大學教授法學博士和田垣謙三、女子高等師範學校教授[illegible]、東京工業學校教授工學博士山田要吉、理科大學教授理學博士飯島魁、文科大學教授物集高見、高等商業學校教授森島修太郎、女子高等師範學校教授中川謙二郎、文科大學教授文學博士井上哲次郎、女子高等師範學校教授野口保興、高等師範學校教授大内健、第一高等中學校教授高津鍬三郎、理科大學助教授菊池安、高等師範學校教授坪井玄道、東京音樂學校教授上眞行、女子高等師範學校附屬高等女學校教員後閑菊野子は明治二十四年女子高等師範學校尋常中學校高等女學校教員學力試驗委員を命ぜられたり。

●宗教的女學校　女學雜誌二百八十號の社説は西洋人社會諸々の評判種となり、ジャパン、メールは之を反譯して掲げたれば一層の問題となり、滿都のおしの善惡風のまにまに音高く聞ゆ。

●舞三四行　前號に掲げたる女舞三四行者婦女史は、大方明治女學校に留まることなるべきよし。

●夏休前の女學生　夏休前の新學期には女學生の入校余程好景氣のよし關東關西のしらせなり、扨て曰へりし如く女學漸々復興の氣運となりぬ。

●明治女學校御刀科　の教授は校外の有志者(但し女子)にも教授を許さるゝこととなりぬ。よりて田邊花圃女史も入門せられたり。

●南洋の女報　三宅雄二郎氏と共に比叡艦に搭して南洋に赴きたる松岡好一氏は到る所ろの女報を記ろし本社に寄せらるゝの約あり。

●明治女學校卒業生　本年の普通科卒業生中吉田なつ女史は甲府英和女學校の教師に聘せられ、同じく岸本柳女史は大阪一致女學校に聘せられ、其他は引續き明治女學校の高等科に入りぬ。尚同卒業生永島なか女史の爲に英本洞光町の有志者送別會を開き盛んなる會合ありき。

●リンド夫人の逝去　多くの禁酒上の小説を著はして有名なるメアリー、ヴェイチル、チャリス、リンド夫人は、昨年逝去せられたり。世の禁酒事業に助力せんが爲め書き著はされたる書物の多かる中に、此夫人の著作程世に多く廣がり且力ありしものはなからぬ。其主なる著作二十七は公立禁酒會より發兌せられ、六千弗程の收入ありたり。

●クラ、バートン　赤十字社及婦人救助事の擴張に熱心盡力さるゝ、クラ、バートン女史は、一箇人の思愛心よりにあらずして思熱なる愛國心より、多くの軍人が墳墓を裝飾し、瑞西公使會に出席し、又故ウヰリアム皇帝陛下より普佛兩鐵十字章を享受せしなど、未だ曾て婦人にして見ざる處の行爲をなし、又榮譽を得られたり。

●ドクトル、セワード女史の逝去　外國傳道會社より印度アラハバットに醫術上の働の爲め赴かれたるス同女史は、此頃虎列剌病の爲同地にて逝去されぬ。女史は前任書記官ウヰリアム、セワルド氏の姪にして、且つウヰラード女史が設置されたる女學校に學び、又賓府醫科女學校を卒業されたり。一千八百七十一年の事なりき、女史同醫學校に在るの日、當時印度西北部の大守サー、ウヰリアム、ミュール氏が、東洋の風俗改良の爲め傳道の企あらんとを望み居らるゝ旨皆知られし時、女史は歐州婦人醫療の爲、女醫として第一に此任に應ぜし處のものなり。今より二年前、女史は亞米利加に歸航し、弘く用金を募集して、アラハバットに病院を設立し、千八百九十年にては一日平均四十四人の患者を療養せりと。

●露國貴族夫人　露國某著露西亞貴族の一人ノヴヰリコー伯の夫人の云へらく、ロシア婦人は、到底一視の同人とせられしきを得可らざるなり。又ロシアの社會の有樣は何れも男女の別なく、其が人格の爲には共に直ちに爭論を初め、一歩も讓らざるの樣ありと。此樂信なる貴婦人は、己が國の婦人が自由を得んとの切望よりして痛歎し語されたり。

●家族と社會、グリペンベルグ男爵夫人報じて曰く、ノビソンド語にて婦人雜誌の初めて發兌されしは、婦人も欣喜するをならん、其な「家族と社會」と名付け此は女學誌の歐文にして、女子問題のみならず禁酒上の事をも掲載せり。

●女子は男子に優る　紐育ウオールド紙は女子は男子に優ると云ふ見出の内に、當今キングス郡アルークリン高架鐵道停車場にては、切符賣として女子を用ひ、好結果を得たる事を記して、世人の注意を引きぬ。彼月最初此案出し時は、誰人も其成功を疑ひぬ。されど今日となりては、何人も之を確認すべき好結果を得たり。

●アインケンス氏の離婚事件　カナダ州マントバなる、ウイニングの府民アイケンス氏が原告につける離婚事件は、カナダ委員總會にて將て裁判されたる幾多の同事件中、その事由の比類なきによりて著名となりたり。其事由たるや、氏の妻が一夫一婦の德を破り斷脱せるにありと。氏は故同國内閣顧問官並にマニトバ副總督たりしエイケンス氏の子息にして、當今同府法學會の會長たり、有名なる、塵家なり。七年以前のカナダ政府の大藏大臣當今ノバスコシアの副總督にして殊に財產家の聞へあるマクレラン氏の一娘に配偶せり。之即氏が離婚を原告せる夫人なり。

手桶湯わかしの[illegible]

（[illegible]中村[illegible]）

一家の[illegible]におゐて、[illegible]を大切にする[illegible]。古しへより倹約の[illegible]みたる所を[illegible]し行くべし。殺て、此の倹約なる[illegible]の用ゐるに[illegible]あり。[illegible]倹約にして[illegible]。[illegible]をして[illegible]入々一家[illegible]みならず[illegible]、一家の[illegible]生ずるのみならず、人々[illegible]一家[illegible]楽しく[illegible]の如く[illegible]家を[illegible]の如き家[illegible]ホームと称するものなり。

此[illegible]志を以て、[illegible]はホームを楽しくするに様々心を砕き多年、文[illegible]学育の上よりして之を試ろみたれど、亦以て一家内の實際の改良を促がすとの大切なるを感じ、先づ家具を簡便にして、細君の労を省き、家[illegible]の入用をゆくするの方法を工夫せんとす。

扱て第一に工夫したるは、手桶湯わかしなり。此は手桶の中に湯わかしを入れ、器具は僅かの炭火にて二十分間に之を熱湯にわかす法なり。図に示すが如し。手桶にても、夏向きは行水につかひても、風呂に[illegible]、手桶に投げ込みて置きて、又二十分間に一杯の湯を得べけれど、[illegible]二十分間に[illegible]湯を得ば、一家の[illegible]重宝ならん。入用ゆへ[illegible]、又の二十分間に[illegible]湯を得ば、[illegible]限りに「手桶湯わかし」と名づく。置き思ひ付き、特許[illegible]中ゆへ・遠からず免許あるべし、左れど[illegible]日下[illegible]一口も早く入用の品と思ひ、八月一日より賣出したり。代價は調製にて一個一圓五十錢とす。更らに追々工夫して廉價にて出來上るやうにすべし。

各地方にても配達致すべし

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社家具部

品名	九月廿四日
白米（一石）	
一等米	[illegible]
二等米	一〇九
三等米	一一三
四等米	一一九
五等米	一二五
正米（一石）	
越後米	[illegible]
美濃米	一四九
尾張米	一四六
一志米	[illegible]
忍館米	一四一
雜穀（一石）	
本貫大麥	[illegible]
上州小麥	[illegible]
竹林麥	[illegible]
梅澤大豆	[illegible]
青柳大豆	[illegible]
吟小豆	一九
黒胡麻	一六
白胡麻	[illegible]
砂糖（一斤）	
赤[illegible]糖	[illegible]
大[illegible]糖	[illegible]
木[illegible]糖	四五
新[illegible]糖	九
醬油（一樽）	
最上物	[illegible]
極上物	[illegible]
上物	[illegible]
中物	[illegible]
並物	[illegible]
味噌（一貫）	
田舎白	七〇〇
地製上赤	七〇〇
同上赤	四三〇
同紅	[illegible]

品名	九月廿四日
絹糸（一斤）	
本練花色	[illegible]
同色物	[illegible]
羽二重黒	[illegible]
同上糸	[illegible]
延糸色	[illegible]
茶縮子	[illegible]
同大色	[illegible]
極太物	[illegible]
色紬	[illegible]
紡糸	四五
眞綿（一貫）	
上々入	[illegible]
上入	[illegible]
並入	[illegible]
最入	[illegible]
竹入	[illegible]
梅入	[illegible]
八王子織物	
本[illegible]	[illegible]
節[illegible]	[illegible]
一[illegible]	[illegible]
黒[illegible]	[illegible]
甲[illegible]	[illegible]
同八本	[illegible]
黒七々	[illegible]
黒斜子	[illegible]
白平地	[illegible]
嘉[illegible]	[illegible]
節仙臺	[illegible]
仙臺平	[illegible]
正紺仙臺	[illegible]
本八丈	[illegible]

品名	九月廿四日
製茶（一斤）	
山城稲頭	[illegible]
同大頭	[illegible]
同中頭	[illegible]
同中茶	[illegible]
狭山稲大頭	[illegible]
同稲頭	[illegible]
同大頭	[illegible]
同中頭	[illegible]
炭（一俵）	
伊豆上	[illegible]
同中	[illegible]
同並	[illegible]
同上	[illegible]
同次	[illegible]
丸上	[illegible]
角上	[illegible]
新木（一把）	
備上	[illegible]
堅木並	九
同上	八五
雑木上	八五
同並	九
水油（一樽）	
地水	[illegible]
胡麻油	[illegible]
荏油	[illegible]
白油	[illegible]
綿油	[illegible]
坂水	[illegible]
石油（一箱）	
チヤスター	[illegible]
デボース	[illegible]
ホーキ	[illegible]
ロシヤ	[illegible]

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

鈴木公壽大人述	つれ〴〵草講義	一冊	價金八錢
鈴木公壽大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木公壽大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	産婦小兒攝生法	一冊	金十六錢
關輪正路君篇	ひめ鏡	一冊	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士[illegible]著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野慣著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校敎師八木 [illegible]	和書手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說[illegible]作[illegible]	八冊	同四十錢
巖本善治著	鈴子小傳	一冊	同八錢

下六番町六番地
女學雜誌社

家庭
廉價 **女學書類發行** 女學雜誌社編輯

子供の談

紙數八十葉 郵稅なし 定價十二錢

右は子供の爲にある好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、童の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉 郵稅なし 定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を過する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉 郵稅なし 定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和書案内

紙數百廿葉 郵稅なし 定價五錢

右は八木雜辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草

紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は育兒の心得を問答體にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は同志社敎師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

女學生

拾六號去ル廿一日發兌セリ

郵税共一冊六錢　郵券一錢増

女學生

牧師の妻は如何

漫筆

閑窓漫言……向陵子

吾人をして大活文章たらしめよ……信水

旅窓漫筆(四國)……天知子

感筆(未完)……假名子

集録

四季あそび謡……(共立女學校)一女

葡萄の連歌……(明治女學校)星野ゆう子

春日出所感……(越後高田女學校)大森みさ子

要草を除く詞……(女子神學校)森田千子

女子教育(英文)……石黑よし子

寄書

離別……小松學人

附録小説 **無想劍**……晴光子

女學生全體各女學校は左の如し

(明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フエリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女學校○東洋英和女學校○青山英和女學校○金城女學校○高田女學校

編輯者星野愼之輔

女學雜誌社發兌

女學講義録

第三號發行(目次)(毎月七日一回發行)

●假名ら式(石版刷)　杉松打雄君

●婦女鑑　落合直文君

●國史學　小中村義象君

●□學　大和田建樹君

●漢文□(漢魏叢書)　佐藤□□郎君

●育兒訓　醫學士　近藤常次郎君

●衛生學　醫學博士　森林太郎君

●作文法　大□文舟君

●書翰文(習字小野君)　小中村義象君

●唱歌教授法　上眞行君

●習字教授法(木版入)　岡田起作君

●女禮式　村住□齋君

女學講義録は女學生の必ず講讀すべき必要なる良書なるのみならず男性も亦通讀すへきものなり且つその講義は何れも斬新にして事實に適切なり。

毎月二回發行一ヶ年完結定價一冊金十二錢十二冊前金一圓十五錢……郵券代用ハ一割増……各地書肆ヨリ取次ヘ求ニ應ズ可シ

●發行所　東京神田中猿樂町十五番地　女學通信會

雜誌定價			
一冊	六錢	郵税五厘	
十二冊半年分	五拾八錢	郵税五錢	(但府内郵税前)
一年分	壹圓拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三版

百人一首講義

上製美本 五十錢 郵税六錢
並製淡裝 三十五錢 同 四錢

淸秋の讀書に宜し 賞物に宜し
歌留多遊びに宜し 詠歌に宜し

女學雜誌社

●●●●●●專門

梅毒 痔疾 子宮 淋疾

右四科は院長が前の大學東校梅毒院勤務中只管該患者に施療したる處にして速に全治受合なり若し全治せざれば藥價返却す●但し診察無料

京橋銀座二丁目東仲通

畑中堂 山本醫院●●●●●●

迎接日 毎木曜日午后三時より 横濱へ第四土曜朝

巖本善治

校外生募集

●本校は九月十六日簿記學部講義録第一號を發兌せり●講義録所載の科目は本校學科と異なることなし

●本校講師が校内生に口授する處を筆記せるものなり故に講義の懇切周到なると筆記文章の平易にして解し易きが爲め直接に其講義を諦聽すると異なることなし

●講義録は毎月五の日を以て發刊す

簿記學講義録

正價 一冊金拾二錢 九冊前金壹圓 十八冊前金壹圓八十錢 郵税ヲ要セズ

●講義録第一號目次●●發行の旨趣●祝詞●簿記學を學ぶ者に關する意見●商用簿記、單式●銀行簿記●官用簿記

●入學は何時にても承諾す●入學金貳十錢●月謝金三十錢●校外生は講義録を無代價とす

●送金 本校會計掛宛東京銀座郵便局へ向け振込あれ

●規則書は講義録第一號に附着せり●規則書のみ入用の向は郵券貳錢送れば進呈す

●●講義録第一號に限り一錢郵券十二枚送れば郵送す

●發行所 東京市京橋區西紺屋町(河岸)七番地

私立 皆成學校

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第三版

百人一首講義

清秋の讀書に宜し
歌留多遊びに宜し

遣物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

●●●●●
專門

婦疾　子宮　病疾

以前診患者に施療したる處にして速に全治
の合なり若し全治せざれば藥價返却す●但
し診察無料
京橋銀座二丁目東仲通

畑中堂
山本醫院

迎接日

毎木曜日午后三時より
横濱へ第四土曜朝

巖本善治

校外生募集

簿記學講義錄

●本校は九月十六日**簿記學部**講義錄**第一號**を發兌せり●講義錄所載の科目は**本校學科**と異なることなし

●**本校講師**が校内生に口授する處を筆記せるものなり故に講義の懇切周到なると筆記文章の平易にして解し易きが爲め直接に其**講義**を諦聽すると異なることなし●講義錄は**毎月五の日**を以て發刊す

正價
一冊金拾二錢
九冊前金壹圓
十八冊前金壹圓八十錢
郵税ヲ要セズ

●講義錄**第一號目次**●發行の旨趣●祝詞●簿記學を學ぶ者に關する意見●商用簿記、單式●銀行簿記●官用簿記

●**入學**は何時にても承認す

●入學金貳十錢●月謝金三十錢●校外生は講義錄を無代價とす

送金　本校會計掛宛東京銀座郵便局へ向け振込あれ

規則書は講義錄第一號に附着せり●規則書の讀み入用の向は郵券貳錢送れば進呈す

●●講義錄**第一號**に限り一錢郵券十二枚送れば郵送す

●**發行所**　東京市京橋區西紺屋町(河岸)七番地

私立**皆成學校**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY